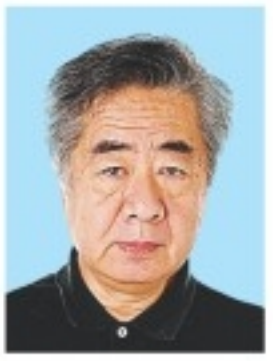
外来種アフリカツメガエル定着
在来小動物、何でも餌に

太田英利
主任研究員



季節風の影響下にあるわが国は、梅雨や台風の時期を中心によく雨が降ります。

国土面積の7、8割を占める山地に降り注いだ雨水は、岩肌や土壌を削りつつ谷筋に集まって急流となり、それらがさらに合流して緩やかで大きな川として平地に出ると、運んできた土壌や砂れきを堆積させ、そこに湿地のある沖積平野をつくりました。

こうした理由で日本の平野部にはもともと湿地が多く、固有種を含む両生類、淡水魚、藻類などさまざまな水生生物の住処となっていました。

こうした平野はヒトにとっても居住場所をはじめ、さまざまな用途があります。一方で、散在する湿地は使い勝手も悪く用途が限られるため、その多くが埋め立てられてきました。

その結果、もともとこうした平野の湿地に住んでいた生き物たちの多くは生息環境を狭められ、水田やかんがい用のため池、河川敷にできた水たまりなどで住処を代用しつつ、ほそぼそと命脈を繋いできたものがほとんどです。近い将来での絶滅が懸念されるいわゆる絶滅危惧種に指定されているものも少なくなく、すでに姿を消してしまったものさえ、一つ二つではありません。

こうした危機的状況にある平地の水場の生き物たちにさらに悪影響を及ぼしているのではないかと懸念されるのが、ミシシッピアカミミガメ、ブラックバス、ブルーギル、ホテイアオイ、オオカナダモなどに代表される「外来種」です。

困ったことに近年でさえ新参の種も加わり続けており、たとえば兵庫県ではここ10年ほどの間に、淡路市の一部のため池で「アフリカツメガエル」という南アフリカ原産のカエルが定着していることがわかりました。このアフリカツメガエルは、在来のカエル類と違い主に水中で過ごすため、定着している場所の住民でもめったに目にすることがありません。

淡路市のため池で捕獲された外来種アフリカツメガエル（東口信行さん提供）

一方で実は大変な大食漢であり、水生昆虫や淡水生貝類、在来の小型のカエル類など、捕らえられる小動物は片っ端から食べていることもわかりました。一頭のアフリカツメガエルの胃から、計200匹あまりに及ぶ「コミズムシ」「マツモムシ」などが見つかった例もあります。

このままこの外来種がさらに分布を広げ、また生息密度を上げていった場合、捕食を通して在来の食物網・生態系に深刻な影響を与えることも十分あり得るでしょう。

正確な現状把握と対策が急がれるところです。

ひとはく研究員だより

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。